

6. 鋤とジョウレン

鋤は鍬とともに弥生時代の稲作開始以来の古顔。これに対してジョウレン（鋤廉）は江戸時代後期にデビューした新顔で、それぞれが大事な役割を受け持った。

鋤は江戸時代のスコップ

<A>～<D>はスキ（鋤）で長さは101cm、96cm、119cm、100cm。溝や穴を掘ったり、底の土をさらえたりする昔のスコップである。大切な土木工器具でもあった。

<D>のように柄に少し角度のついた鋤は、冬場に菜種や麦の畑の谷の土をのせてタツと根元に被せて叩くという。鋤を使えば綺麗に仕上がったという。

鋤・鍬をセットで伝える

弥生時代の稲作の頃から鍬と鋤とはセットで使われてきた。だがその後、地域によって鍬と鋤に消長があり、鋤を使わない地域も出てきた。たとえば九州では鍬は使うが鋤は使わず、スキといえば犁のことを指す。それに比べれば摂津市域は弥生時代以来と鍬と鋤のセット関係を2000年来崩さずに伝えてきたことになる。

丸先から角先へ

鋤も鍬と同じく木部に鉄製の刃先をはめ込む形をとるが、これも古墳時代以来のことである。その形はローマ字のU字形をしていて、その刃先そのものを鍬と呼んだ。武将の兜の鍬形の名もそこからきている。この兜の鍬形に似たのが、昆虫のクワガタムシだ。

平安から室町時代頃の絵巻物に出てくる鋤や鍬の刃先は丸くU字形で、古墳時代のもとの基本的には変わらない。刃先が今のように四角くなるのは安土桃山以降である。

鍛冶屋とサッカケ

鋤や鍬の刃先の製作は鍛冶屋の仕事だが、使いへらした鋤や鍬の補修も大きな比重をしめる。刃先の減った部分をタガネで落とし、新しい鉄を鍛着し、表面にハガネをつけることをサッカケ（先掛け）と呼んだ。千里丘の金剛院の西側に鍛冶屋があった（千里丘）。宇野辺に鍛冶屋がいて、年1～2回まわって来て持っていんで（帰って）修理した。さぶい（寒い）時分やった。この鍛冶屋は專業だった（庄屋）。

鋤廉の登場

ジョウレン（鋤廉）は江戸時代後期から使われた道具で<E>のように平が鉄板のものから<F>のような竹の簀、その他金網まで多種多様。柄は<E>120cm、<F>116cm。ドベヒキという水路の泥さらえから田のアゼヌリ、川のシジミもすくう便利な道具。

蒸気船の時代、小船に数人が乗り込んで鋤廉で水路を浚える賃仕事があったという。

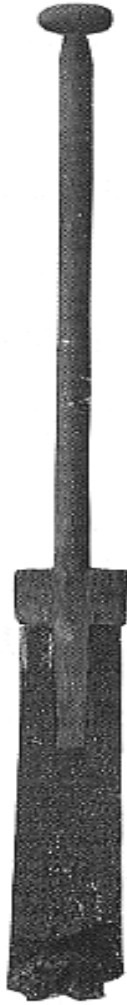
A



B



C



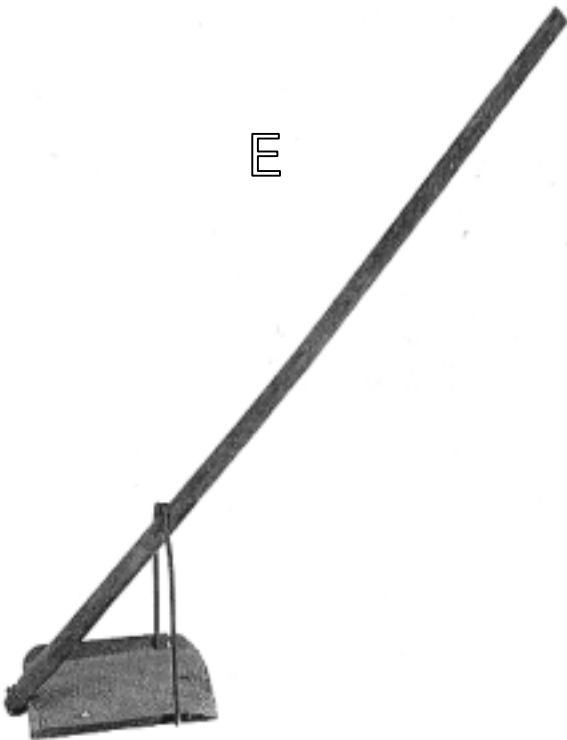
D



E



F



F

